

河内大塚山古墳の「ごぼ石」

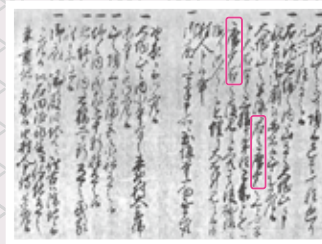
西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)



▲ゴーランド撮影の明治時代の河内大塚山古墳 (平成4年11月27日,朝日新聞より転載)



▲河内大塚山古墳買上げの記事 (大正15年2月26日,大阪朝日新聞より転載)



▲「石之磨戸」「磨戸石」の表記 (『阿保親王事取集』文政8年,山口県文書館蔵)



▲「ごぼ石」(『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告第五輯』より転載,昭和9年)

欽明天皇は河内古市で殯を行い、大塚山の横穴式石室に埋葬か

西大塚1丁目目所在する河内大塚山古墳は、全長三三五メートルもあるわが国で五番目に大きな前方後円墳です。六世紀後半ごろにつくられたと思われる、私は五七一年に亡くなったとされる二十九代の欽明天皇の最初の墓だったと考えています。『日本書紀』は、欽明が王宮のあった大和の磯城嶋金刺宮(桜井市)で亡くなり、河内の古市で殯を営んだと記しています。殯とは、大王(天皇)の本葬をする前に、棺に遺骸を納めて仮に祭ることです。古市は、世界遺産となった羽曳野・藤井寺市の古市古墳群エリアです。

殯を終えた欽明は、近くの石室の完成していた河内大塚山古墳に葬られたと思います。六世紀後半の権力者の墓は、横穴式石室とよばれるものです。

もともと、欽明は五〜六世紀前半にかけての伝統的な天皇家の墓域である古市に殯が設けられ、陵を築いたのではないのでしょうか。しかし、その後、大和の飛鳥に居をかまえて、王権を握った蘇我氏の娘の堅塩媛が皇后となるなど、蘇我氏の後ろだてで、欽明は後につくられた宮内庁の陵墓参考地である五条野丸山古墳(橿原市)に改葬されたとは私は推論しています。ただし、宮内庁は、五条野丸山古墳近くの平田梅山古墳(明日香村)を欽明の檜隈坂合陵として治定しています。さて、河内大塚山古墳の墓室に使わ

れたと思われる石室の一部が、神社の手洗鉢に転用され、柴籬神社(上田7丁目)に移されていることは前号で紹介しました。同石について、明治末期に河内地方を踏査した岩井武俊は『歴史地理』第19巻6号(明治四十五年八月)で、次のような興味深い伝承を記しています。

「後円部即ち南方は大体封土を存じて参謀本部製2万分の1図によれば、標高45・3となつてゐる。山頂には何等の形跡だも今は存せぬが、南麓に圓形に大樹でした牆を繞らし、その中に1個の大石が現はれてゐる。その石の全半は程遠からぬ柴籬神社に持ち去つたが、一夜帰へるべくこの石が鳴動したなどと、大層な傳説が附會されている。」

大石に関し、江戸時代には大塚山が長州(山口県)の藩主であった毛利氏の始祖とされる阿保親王の墓であると伝わっていましたので、毛利氏は家臣を大塚山に遣わし、調査をさせました。その記録が文政八年(一八二五)にまとめられた『阿保親王事取集』(山口県文書館蔵)でした。私は、文中に「石之磨戸」とか「磨戸石」という文字が記されていることを見つけ、後円部に石を磨いて加工した横穴式石室が開口していたことがわかったのです。

後円部南麓に設けられた大石は、地元では「ごぼ石」とよばれ、戦前に撮影された写真が知られています。「ごぼ石」は「御廟石」「牛石」「夜泣き石」とよぶこともありました。宮内庁が調査を行い、今も「ごぼ石」は後円部中段に露出しています。

推定三十トンで、幅四×奥行三×高さ二メートルを測り、東大阪から八尾市に至る生駒山西麓から搬入されたと思われる花崗閃緑岩でした。柴籬神社に移された大石も「ごぼ石」ですが、これは黒雲母花崗岩でしたので、各地の石が切り出されていたと考えられます。

私は、宮内庁に対して、墳丘に入れない天皇陵などの公開を要望する研究者の学会に所属し、担当委員として多くの陵墓古墳の立ち入りに参加してきました。大塚山古墳にも入れていただき、「ごぼ石」を実見しました。

岩井が大塚山に来たころの明治期の写真が残っています。イギリスのウィリアム・ゴーランドによるものです。ゴーランドは明治五年(一八七二)、大阪の造幣寮(現造幣局)にお雇い外国人の技師として来日しました。彼は考古学に関心があり、大塚山へも足を運び、写真を撮ったのです。今のように樹木が茂らず、田畑や後円部上に大塚社(天満宮)の白壁の塀もぞまれます。

大塚山はのち大正十年(一九二二)に国の史蹟指定を受け、同十四年(一九二五)には陵墓参考地となりました。これに伴い、墳丘内にあった集落は、東大塚村側(羽曳野市南恵我之荘)に移され(昭和二三年)、昭和九年(一九三四)に古墳の土地買収が完了しました。その後、昭和十六年(一九四二)には史蹟指定が解除され、宮内省(現宮内庁)によって、現在に至るまで管理が続けられているのです。